

深い学びへとつなぐ、「道徳的価値」や「教材」への自我関与

道徳研究会議

研究員 石原 正樹 (川崎市立小杉小学校)

青木 奈美 (川崎市立平小学校)

山口 唯 (川崎市立向丘中学校)

西村 翔 (川崎市立はるひ野中学校)

指導主事 岡部 啓子

I 主題設定の理由

特別の教科 道徳 (以下道徳科) は、教科化されてから小学校は6年目、中学校は5年目を迎えている。児童生徒のよりよく生きるための道徳性を養うことを目標にしている道徳科について、「自分との関わりで考えること」や「多面的・多角的に考えること」は、大切にしたい学習活動であることを理解している教師は多い。児童生徒も各教科等と同様に学び方を知っているようになっている。

文部科学省の道徳教育実施状況調査 (令和3年度) では、道徳科の授業で、「本当に自分のこととして捉え、深まっているか」という指導上の課題があることが分かった。本市でも令和5年度に教師への調査を行った結果、「自分事にしづらい内容項目や教材の特徴がある」との声が多くあった。児童生徒の普段の生活で、あまり意識していない内容項目や実生活と結び付けにくい教材の内容等に教師側の授業の困り感があることが明らかになった。

学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編 (以下解説) には「道徳的諸価値についての理解と自己の生き方についての考えを、相互に関連付けることによって、深い理解、深い考えとなっていく」「自己の生き方についての考えを深めることを強く意識して指導することが重要」とある。このことから、深い理解、深い考えを引き出す授業をするには、「道徳的諸価値」や活用する「教材」に自分との関わりで考える「自我関与」が重要であることが分かる。

本研究会議では、道徳科における深い学びを再確認し、資質・能力である道徳性を育成するためには、自我関与を強く意識した学習活動を実現する必要があると考え、本研究主題を設定し研究を進めていくこととした。

II 研究の内容

1 研究の方法

(1) 道徳科における「深い学び」と本研究における「自我関与」の捉え方

道徳科における深い学びを考えると、これまでの「道徳の時間の課題」を踏まえると見えてくるものがある。主な課題は、主題やねらいの設定が不十分で単なる生活体験の話し合いの指導、登場人物の心情理解に終始する指導などが挙げられている (平成28年「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について)。これに対し、解説 (中学校) では「各教科、総合的な学習の時間及び特別活動などで学習した道徳的諸価値を、全体にわたって人間としての在り方や生き方という視点から捉え直し、自分のこととして理解し、自分との関わりで道徳的諸価値を捉え、自分なりに発展させていこうとする時間」と示され、「自分」という言葉が複数使われていることから、深い学びには、自我関与が欠かせない。

道徳科の授業を考えると、教師は、深い学びになるよう指導方法の工夫に努めている。これまでの課題であった、教師の一方的な押し付けや単なる生活体験の話し合いなどに終始することから脱却し、正面から道徳的価値について考える授業へと、質的転換を図ることが求められている。質的転換の一つとして、自分との関わりで考えること、つまり自我関与することが必要となってくる。

本研究では、深い学びを、「児童生徒が、ねらいとする道徳的価値を自分との関わりで考え、これまでに学習した内容や自分の経験を関連付けて考えることを通して、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題がもてる」こと、自我関与を「道徳的価値について、自分がどのように捉え、どのような葛藤があるのか、また、道徳的価値を実現することにどのような意味を見いだすことができるのかを捉える」こととして授業づくりに生かしていく。

(2) 市内教師アンケートからの分析

本市の小中学校の教師に取ったアンケート¹結果から、どんな内容項目や教材が自我関与しにくいと感じるのかを分析した(表1)。

表1にあるように、普段の生活では意識しづらい内容項目が多く挙げられている。内容項目の中には、「親切, 思いやり(中学校は思いやり, 感謝)」「よりよい学校生活, 集団生活の充実」など、児童生徒の身近に感じられるものがある一方、「感動, 畏敬の念」「国際理解, 国際貢献(国際親善)」など生活経験から遠いと感じるものがある。

指導する教師は、児童生徒が身近に感じにくい内容項目に困難さを感じていると考えられる。

また、教材の特徴としても、時代背景が古いもの、外国の話、偉業を成し遂げた人物の話など、教材の内容を理解するのに苦労したり、どこか遠くの偉い人の話のように、遠い存在になってしまったりすることも困難さの一つと考えられる。アンケートから自我関与のしにくさをまとめると表2のような結果となった。これを困難さの分析として授業の手立てを考えていく。

(3) 困難さの分析から、指導の手立てを考える

困難さの分析をもとに、まず、扱う内容項目と教材がどのように自我関与しにくいのかを分析し、その困難さに対してどのような手立てをとるのかを考える。検証授業を通して、児童生徒の反応から、講じた手立てについて有効であったかどうかを検証する。

2 検証授業について

(1) 小学校1年生の授業 【内容項目：D(17) 生命の尊さ 教材名「いきているって」】

①困難さの分析

この内容項目に関する教材は、教科書に年間3回設定²されている。生命の尊さについて、解説では「見過ごしがちな生きている証を実感させたい」と示されている。しかし、生活経験を「生きている証」として言語化することや、当たり前すぎる「食べることや寝ること」などから生きていることの素晴らしさを感じるのは難しい。

また、1つの内容項目に対して複数教材を使用することは、それぞれ、どこまでの内容を扱えばよいか分かりにくい。さらに、今回使用した教材は「詩」を扱っている。児童に読んだ経験がほとんどない上に、共感する登場人物がないため、ねらいにせまるために何を取り上げるのが難しい。

表1 自我関与しにくいと感じる内容項目や教材とその理由

内容項目	理由	教材の特徴	理由
・伝統と文化の尊重, 国や郷土を愛する態度(小) ・郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度(中)	・日常と離れていて実生活と結びつけにくい ・1時間で道徳的価値を子どもに考えさせるのが難しい	・詩(歌詞)などを中心に扱っている	・詩や歌詞は話し合いが難しい ・その教材で何を求めればよいか分からない ・時代背景の説明と理解で多くの時間を要する
・感動, 畏敬の念	・自分との関わりで捉えにくい ・興味関心をもたせにくい	・時代設定が児童生徒の実生活と遠い	・功績が大きい人は素晴らしいで終わってしまう。
・国際理解, 国際貢献(国際親善)		・写真、絵、グラフなどを中心に扱っている	

表2 困難さの分析

内容項目	A 児童生徒の経験が少ない
	B 1年に一度しかない
	C 道徳的価値が身近でない
教材の特徴	a 偉業を達成した登場人物
	b 同じ内容項目の教材が複数設定
	c 話のスケールが大きい
	d 当たり前すぎる内容

1 アンケートについて 対象：小学校教諭65名、中学校教諭48名 時期：4月～5月に実施 回答方式：アンケート用紙に記述

2 教科書について 本市では、小学校は光村図書出版 中学校は学研の教科書を使用している

②困難さへの手立て

複数教材が設定されている内容項目については、解説の指導の要点から、教材の内容との関連性を意識した。本市で採用している教科書には、「生きている証」を実感できるように構成された教材が2つ、「家族の思いに気付く」ことができる教材が1つ掲載されている。それぞれの特徴を生かし、焦点化して授業を組み立てた。また、「生きている証」を実感できるように構成された2つの教材も既習を生かす展開とした（表3）。

表3 困難さへの手立て

	困難さの分析	手立て
内容項目	生きることは当たり前でその素晴らしさを実感しにくい【A】	3教材の指導内容の焦点化、継続的な指導 前回の学習との違いを焦点化
教材の特徴	「詩」教材は自我関与しにくい【b】	動作化、他者参照
	教材の内容から「生きている」という見方をするのが難しい【b】【d】	前回の教材を生かし、さらに考えを広げ深める展開

③検証授業の様子

教材「いきているって」は詩で構成され、詩の中に「いつもは きが つかないけれど」という文がある。解説にある「見過ごしがちな」という点と一致するため、この点に焦点をあてて授業を展開した。気付きにくい

「深呼吸すること」「楽しいじゃんけん」が内容に盛り込まれており、動作化することで実感できるようにした。さらに前回の「生命の尊さ」の学習で使用したワークシートを活用した。児童が感じた「生きている証」を追加していくことで、既習を生かし、児童の考えを広げることができた。自分の考えに自信がもてなかった児童も、前回の学習で「ごはんがおいしいとき」を挙げ、今回の学習では「運動、野球、サッカーをしているとき」と考えていた。また、学習のテーマをうまく捉えられなかった児童も、「学校が楽しい」から「友達と絵本を読むとき」と考え、それぞれ、自分の生活の具体的な場面を想像しながら考えを出す姿が見られた。

（2）小学校2年生の授業 【内容項目：D（19）感動、畏敬の念 教材名「きらきら」】

①困難さの分析

この内容項目に関する教材は、教科書に年間1回設定されている。また、児童は、身の回りにある美しいものに自然と触れてきていると考えられるが、「美しい」と改めて立ち止まって考えることは少ない。そのため、身の回りにある美しさを聞いてもすぐには想起しにくいことが考えられる。

②困難さへの手立て

表4 困難さへの手立て

	困難さの分析	手立て
内容項目	「美しい」と感じる心がどのような気持ちなのかイメージしにくい【A】	本物とイメージの違いから美しいと感じることを言語化
	1年に一度しかない【B】	道徳教育として学習後の取組を設定
教材の特徴	「身の回りの美しいもの」と聞いてもすぐに想起しにくい【c】	写真、音声の活用（身近な自然）

解説には「児童が美しいものに触れて心が揺さぶられたときには、その思いを教師が大切にするとともに、児童の感動を他の児童にも共有できるように働きかける」ことで感性を豊かに育むことが示されている。「美しい」の様々な捉え方ができるように、感じ方を言語化する工夫をした。また、この1時間だけでなく、これからの生活の中で「美しい」ものを児童が主体的に見つけられるように、「きらきらアルバム」という事後活動を期間限定で設定し、GIGA 端末で撮影したものを友達と共有できるようにした（表4）。

③検証授業の様子

教材には谷川俊太郎氏の詩と共に雪の結晶の写真が掲載されている。導入では、教科書を見る前に雪のイメージを児童に描かせてから、雪の結晶の写真を見せた。自分の雪のイメージと違った児童は「輝いている」「めずらしい」「〇〇みたい」と感想を素直に表現したため、黒板に書き、美しい以外の言葉を残した。また、身の回りの美しいものと言われてもすぐに想起しにくいことから、自然の風景や波の音、虫の鳴き声、校内掲示物など児童の身の回りにあるものを写真や音声で用意した。写真はGIGA 端末上で児童が選択できるようにし、友達が選んだ美しいものを見ることも可能にした。

授業の終わりに、「今日から身の回りにある美しいものを探してみよう。」と教師が投げかけると、「やりたい。」「GIGA 端末をもって帰ってもいいですか。」と意欲的な声が多く上がった。帰りの会で紹介する時間をとり、それぞれが集めた写真「きらきらアルバム」は教室に掲示し、いつでも見られるようにした(図1)。



図1 きらきらアルバムを見ている児童

自分の考えを書いたり話したりすることが苦手な児童も、導入でイメージの違いから関心を高め、選択肢の中から自分が感じた美しいものを選んで理由を書くことができた。物事への関心があまり見られなかった児童も、学習後の「きらきらアルバム」の取組が意欲的になり、自分で見つけたものの紹介を楽しみにしていた。また、友達が紹介するものにも「わあ、きれい。」と美しさを共感している様子が見られた。

(3) 中学校2年生の授業

【内容項目：A(4) 希望と勇気, 克己と強い意志 教材名「尾高惇忠が目指した富岡製糸場」】

① 困難さの分析

この教材は、登場人物が困難や失敗を乗り越える姿を通して意志の強さを感じることができる内容である。しかし生徒にとっては、古い時代の登場人物の行いが偉大すぎてただ感心して終わってしまい、自分と照らし合わせにくい。さらに、失敗や困難の経験や、先の目標などを具体的に想起できない生徒がいるという点においても困難さがある。そこで教材へのアプローチの仕方について手立てを考えた。

表5 困難さへの手立て

	困難さの分析	手立て
内容項目	生徒の経験が少ない 具体的に想起できない【A】	失敗や困難を疑似体験
教材の特徴	古い時代のあまり知らない偉人【b】	ライフチャート
	偉人の行いに対し「すごい」で終わる【c】	役割演技 自分版ライフチャート

② 困難さへの手立て

登場人物の偉業達成までの葛藤や気持ちをグラフにした「ライフチャート³⁾」を教材へのアプローチとして活用し、内容理解の手助けとした。授業の後半に「自分版ライフチャート」を作成することで、困難直面時の自分の考えと比較しやすくし、ねらいに対する自分との関わりをより深めていく手立てとした。その他にも「役割演技」など今までも取り入れている手立てを組み合わせることで授業を行った。これらの手立てを通し、自分軸で最後まで教材に関われるようにした(表5)。

③ 検証授業の様子

「ライフチャート(図2)」を提示した際は、一部を隠しながら徐々に見せることで、生徒の想像が膨らんでいった様子が見られた。登場人物をよく知らなくても、話の内容や人物に興味をもつアプローチとして有効であった。また、授業中、常に見返すこともできた。「自分版ライフチャート」では、目標への過程で予測される困難にも、自分に向けて前向きなアドバイスを記入し、実践意欲を高めようとする姿が見られた。自我関与が苦手な生徒も「ライフチャート」を広げた時、顔を上げてしっかり見ようとする姿や、「自分版ライフチャート」を作成しながら道徳的価値(意志を通すこと)の難しさを考える姿が見られた。また、ねらいからずれやすい生徒も、「登場人物の行いを自身と重ね、「予想外のハプニングもあるから、それを乗り越えながら〇〇を頑張りたい。」と最後まで自分軸で教材と関わる事ができ、深い学びにつなげることができた。

葛藤度合い

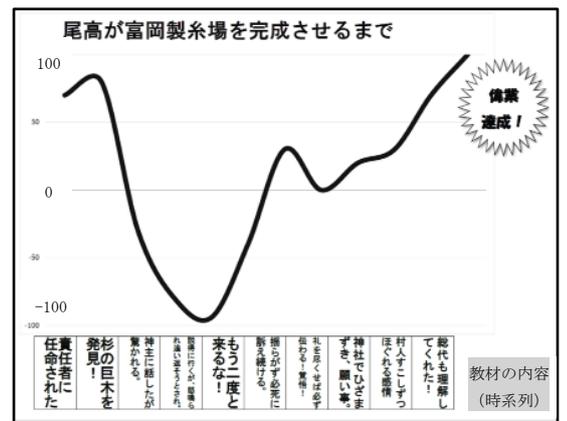


図2 ライフチャート

3 この教材では登場人物の葛藤や気持ちを普通の気持ちを縦軸にし、「0」を通常の気持ちとしてプラスかマイナスかを表し、横軸に偉業達成までの出来事を時系列に並べた。登場人物の人生の紆余曲折をグラフに表すことで教材の内容理解の手助けとした。

(4) 中学校3年生の授業【内容項目：C (18) 国際理解, 国際貢献 教材名「杉原千畝の選択」】

①困難さの分析

この内容項目は「世界の平和に貢献する」という壮大なテーマで、教科書に年間3回設定されている。国際的視野に立って世界の平和に貢献するという道徳的価値が身近に感じにくい生徒が多く、興味の有無や知識の差によって、世界に視野を広げることが難しい生徒もいる。また、教材の登場人物の偉業や当時の時代背景など、想像しにくいことも自我関与のしにくさとして考えられる。

②困難さへの手立て

考えるテーマが壮大だと、望ましいと思うことを言ったり書いたりする授業になることが予想される。そうならないためにも、3教材設定されているという点を生かし、学習内容を関連させた計画を立てた。

表6 困難さへの手立て

	困難さの分析	手立て
内容項目	テーマが壮大、興味の有無、知識の差【A】【C】	3教材を通した構成で計画
教材の特徴	偉人が関わる【a】【b】	動画の使用
	時代背景を想像しづらい【c】	アンケートの活用
	世界の平和が大事だと、分かっている【d】	心の数直線 社会科との関わり

それぞれの中心発問を「日本人としての自分」「中学生としての自分」「なぜ国際貢献することは大事なのか」とし、徐々に自分にせまっていくワークシートを作成した(図3)。3時間分が記入できるようにし、自分の考えを参考にしながら次の学習の考えを出せるようにした。また、時代背景や登場人物についての動画の使用や社会科の授業の想起、一人一人の考えを表出するためにスケール「心の数直線⁴(熊本市教育センター作成)」の活用などの手立てを考えた(表6)。

③検証授業の様子

1、2回目の学習では、募金や寄付などのすぐ思いつく行為を考えている生徒が多かったが、3回目の学習では、「国際貢献とは、私たちが真っ先に思いつく募金のようなものやお金を渡して終わりというものではなく、これから先、協力がなくてもよい未来が築けるような行動をすることが大事だと思う。」

「国際貢献は大切だけど、あまり身近に感じていなかったと気付いた。相手の価値観を尊重するなど、自分にできる国際貢献をしていきたい。」「人のため、国のため、世界のために行動するのは難しいけど、自分がもし、〇〇の立場だったら…という考えが必要だと思った。」など、自分の考えを深めている様子があった。自我関与しにくい生徒も「今までは自分の身の回りのことしか考えていなかったが、世界に目を向けてどのような問題があるかを知り、世界平和という誰も取り残されないすべての人が幸せな世界をつくるために自分ができることを考えていきたい。」と道徳的価値について考え始めようとする姿もあった。

また、動画等で興味や内容理解を助けたり、スケール「心の数直線」を利用し、2択だけでは表現できない部分を数値化して表現したりすることで一人一人が自分の考えを表出することができた(図4)。

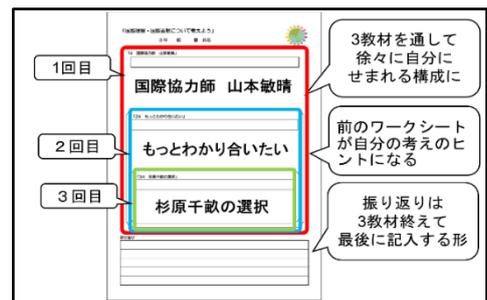


図3 3教材一体型のワークシート



図4 スケールを使って話し合いをする様子

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 困難さの分析、手立てから見えてきたこと

道徳科の授業の困難さは、1つの内容項目、1つの教材に「〇〇だけが当てはまる」ということはなく、様々な困難さが組み合わさっていることが通常である。今回の研究を通して4つの着目する点が見えてきた。

①教材へのアプローチの仕方の工夫

4 熊本市教育センター デジタル教材「心の数直線」https://www.kumamoto-kmm.ed.jp/kyouzai/web/Heart-meter3/Heart-meter3_manual.pdf

教材の時代背景が古いものや偉業達成した人物が扱われている場合は、「ライフチャート」のような人生や出来事のグラフを範読前に見せることで内容理解の手助けとなった。今まででも心情曲線というものはよく使われていたが、今回は使用するタイミングを教材の範読前にしたこと、ライフチャートと同じことを自分版にして作成してみるということが、「道徳的価値を自分がどのように捉え、どのような葛藤があるのか」を考えることにつながった。

②同じ内容項目が複数ある場合の授業の工夫

同じ内容項目の教材が複数設定されている場合、解説の指導の要点と教材の特徴が一致する部分に焦点化した授業を教師が考えることで、児童生徒の自我関与にも具体性が伴ったものになることが分かった。低学年の児童でも、「生きている証」「美しいもの」を具体的に考え、実感することで「道徳的価値を自分がどのように捉えたか」を考えることにつながった。

③年間1回しかない内容項目の扱い方の工夫

1時間で考えを深めることが難しいと判断した場合、道徳教育として関連付けて計画することが有効なことが分かった。今回は道徳科をきっかけに道徳的価値について深めようする姿を他の教育活動で追うことができた。自分が美しいと思うものを探す活動期間を設定したことによって時間をかけて感じ取り、同じ活動をし合う友達の様子にも共感することで「道徳的価値を自分がどのように捉え、どのような意味を見いだすことができるのか」を考えることにつながった。

④児童生徒が身近に感じにくい道徳的価値の扱い方の工夫

道徳的価値が児童生徒にとって身近に感じにくい場合で、その教材が複数ある場合は、既習を生かし、学習の履歴を利用することが有効であった。前回考えたことを踏まえた思考になるように、あらかじめ複数教材の授業計画、ワークシート計画等を立てることで、道徳的価値についての捉え方、葛藤、意義について考えることにつながった。小学校1年生も中学校3年生もそれぞれが学習履歴を活用することができた。

(2) 深い学びへとつなぐ自我関与と見える化の有効性

検証授業では、自我関与できる手立てをとったことで、今までの自分にはなかった考えを見つけたり、自分の価値観を広げたりする姿を発言や記述等から見取ることができた。また、「見える化」することを多用し、自分の考えはもちろん、友達考え、登場人物の人生等、GIGA 端末でも黒板でもワークシートでも目的に応じて使い分けることで、自分の考えと比較したり、友達の考えを取り入れたりすることが容易になり、自分の思考を客観的に見ることにつながった。道徳科の授業では、同じ考えでも少しの違いを見えやすくすることで自我関与がしやすくなり、道徳的価値に対する学びが深まることが分かった。

2 今後の課題

これからの道徳科では、多種多様な教材が作られていくことが予想される。身近に感じにくいからと敬遠するのではなく、児童生徒の新たな感じ方、考え方を引き出す魅力のある教材に、どのように自我関与させていくかを考えていくことが求められる。教材の特徴を分析し、解説の指導の要点と照らし合わせて考えていくことが、授業づくりの基礎となるように、「道徳的価値を考えるための教材活用」という意識を高めていく必要がある。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究を支援していただいた研究員所属校の校長先生並びに教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

【参考文献】

浅見哲也『道徳科 授業構想グランドデザイン』
「道徳教育」 1月号 NO.775

明治図書出版 2021年
明治図書出版 2023年